

第三十四章 ノロの研究

ノロの惑星では爬虫類が幅をきかせていた。やがて鳥類、哺乳類が現れるはずだ。ノロは地球の生命誕生から人類の出現までの歴史を研究していた。最近の人類は戦争ばかりしているが、ノロが注目したのは人類が地球に現れてからしばらくの間、戦争がなかったことだ。もちろんそのころは人口が少ないから戦争と言うよりは喧嘩に近かっただろう。道具も発達していないから武器と言えどもオモチャも同然だった。

ノロが武器よりルールに注目した。文字がなかったころは言葉も幼稚だからルール作りは困難だと考えた。つまり文明を持つに至ってないから結果として平和だったのではと推測した。人口が増えると徐々にルールが必要になった。意思疎通、情報伝達が増加すると会話の内容が濃密になってやがて文字が生まれる。文字を持たない文明もあつたが、インカやマヤなどは小規模な集団だったし、地理的に閉鎖されていたからだつたのだろう。

交流が盛んになり市場が形成された。喜怒哀楽が言葉と文字を介して広がると摩擦も生じた。市場を通じて交換されるものと言えば食糧だったがやがて道具にも広がった。美味しいもの便利なものが瞬く間に市場を通じて共有された。そのような時代、ほんの少しだけ頭がいい者が富を手に入れることができた。多分平等という言葉はこのときに生まれたのだろう。

貧富の差が生まれた。格差社会の到来だ。富は富を呼ぶ。そのための理屈がルールだ。それに富は守らなければならぬし増やさなければならぬ。

一方、使い勝手のいい道具は武器の卵になる。卵は殻を破って新たな武器へと進化する。次の卵は大きくなる。稲や麦を刈るナイフや魚を釣る針や猛獣に対抗するための槍が活躍する。そしてまた大きな卵が産み落とされる。

人類の脳も成長したが、人類が出現したときと比べて数倍になっただけだ。しかし、武器の殺傷能力は人口増加率を遙かに上回る。あまりに脳の発達と武器の発達がアンバランスなので人類にはそう遠くない時期に滅びるのではとノロは考えた。そして次のように考え始めた。

地球のどこを探してもこんな好戦的な生物はいない。どうしてこんな生物が出現したのか。進化と言うが他の生物に比べて異常すぎる人類。文明を持つてからというもの人類は戦争に明け暮れるようになったが、果たして文明とはいったい何なのか。

戦争のことを文明というのだろうか。ノロは悩む。

植物はもちろん動物も生存競争に明け暮れる。しかし、生存競争しているのではない。たまにボスを持つ群れを形成する動物も居るが、支配者と奴隷に分かれることはない。ほぼ対等な関係を持つ。わざわざ「平等」や「公平」などと叫ばなくても暮らしていける単純なルールの中で寿命を全うする。全うできなくても他の生命体に自分の身を捧げるだけのことと母なる地球を維持する奉仕活動をしているだけだ。

平和であれば誰でも幸福なのかも知れないが、平和でなければその原因を造った一部の権力者以外はすべて不幸になる。当たり前前のこの理屈が人類には通用しない。だから「平和を！」と「平等！」とかを求めて立ち上がる。当然これも戦争と同じでほとんどの場合血が流れる。

*

「結局すべての人間がゴキブリなれば平和な社会が訪れるのかなあ。まあ、それを社会と呼ぶかどうかは別にして」

ノロは毎日草花や昆虫と過ごし、両生類や爬虫類と戯れたり魚釣りに出かけたりする。ノロはこの惑星で充実した人生を送っている。しかも小うるさいイリもない。

「ここは天国だ」

ただ一つだけ問題があった。それは天変地異だ。火山の噴火、大地震と大津波、台風、隕石の落下、山火事、大雨と大洪水……。この惑星にはノロと地球を脱出したグレーデッドの残党しかないから被害額は計算されない。爬虫類も数は知れているし、鳥類や哺乳類はほとんど存在しない。どの生命体も天変地異をなんとか凌いでいる。

ノロはたがねと金槌を持って岩や石を割ってルーペで組成を調べる。時にはダイヤモンドの原石や金鉱を発見する。

「地球なら俺は大金持ちになっているなあ。でもダイヤモンドはイリに取り上げられてしまう。別に構わないけど」

今ノロはグレーデッドの残党というよりは親しい仲間とともに巨大な洞窟の中にいる。キラキラ輝く金の鉱脈、磨かなければ輝かないダイヤモンドの原石、鏡のような水銀の池、酸化して赤光を発する鉄鉱石……。現物を目の当たりにするとノロと言えども興奮する。

鉱物採取しながらどンドン洞窟を進む。もちろんお供は自重を薦める。

「ここは一旦戻りましょう。とりあえず採取したものを分析してから再調査しましょう」

意外にもノロはこの助言に素直に従う。そのとき洞窟の一角が崩れる。誰かがノロの腕を掴み引きずる。バラバラと小石が落ちてくる。洞窟が崩壊する前兆かもしれない。急にガイガーカウンターが奇妙な音を立てる。

「放射能！」

目の前に時空間移動装置が姿を現す。

「急げ！」

誰かが時空間移動装置を洞窟の中に移動させたのだろう。分乗して洞窟の上空に移動する。時空間移動装置のモニターを見つめて全員が驚く。大きな山全体が崩れ出している。ノロたちの洞窟内での行動で山が崩れることはない。時空間移動装置を洞窟に次元移動させたことが大崩落を助長したのかもしれないが、今のところ不明だ。

結局手ぶらで研究室に戻ることになった。もちろん崩落が落ち着けばその原因を調べるべく準備にかかる。崩落で蔓延した煙が晴れると驚くべきものが現れる。